ご注文は？

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ご注文は？

【Ｎコード】
Ｎ１２８０Ｈ

【作者名】
ＭＭＲ

【あらすじ】
ファミレスで働くようになった女の友人が大人気。なんとなく面白くないこの気持ちはやっぱり…？

「いらっしゃいませー、あっ、今日も来てくれたんだね！こちらへどうぞー」
客が入ってきたことを告げる控えめな鈴の音と共に、駆け寄ってくる一人のウエイトレス。
それが彼女であったことにほっとして頬がゆるんだ。
暑いというほどではないがこの時期特有の湿気があるせいで汗がにじみ出ていたけれど、店の空調で程よく乾かしてくれる。
だけど、それとは違う理由で出てくる汗は止まらない。背中でひとすじまっすぐ流れ落ちていくのを感じて、その気持ち悪さに震えそうになる。
「こちらのお席にどうぞっ、いつものでいいよね？すぐ持ってくるね」
僕を席につかせると、もはや注文さえ聞かずに彼女は厨房の方へ駆け出す。
ぱたぱたと文字通り靴を鳴らしながら動く姿は、なんとも可愛らしく見えた。

彼女は、学校の同級生でもある。
というか、けっこう仲の良いほうだと思う。
ファミレスでバイトをするというのも、僕に相談していた。
その時は何も考えず、やればいいんじゃないかということを言ってしまったが…
「まさか、こんなに人気になるとはな」
彼女がバイトを始めてからというもの、突然客足が増えた。元々この店に通っていた僕から見て思うことだ。
人がそれほどいないから、ということで彼女に勧めたのだが、彼女そのものが集客効果を生んでしまうとは想像さえしていなかった。

さらにそのことで、僕自身が気がついてしまった想いもあった。
決して人気が出たのに便乗したというわけじゃない。それこそ最初の頃は彼女も楽しそうにしていたので良かったという感情しかなかった。
だけど、どこか引っかかるようなものはその時からあったんだ。
しばらくして気づく。間違いなく、それは嫉妬というかたちで。
「おまちどうさまー！今日もいいできになったよ、よーく味わっていってね？」
そんな僕の気も知らず、彼女はもはや板についてきた笑顔を見せつつ、僕の前にいつものブレンドを置いていく。
彼女のそんな慣れた手つきを見て思う。この笑顔を他人にも振りまいているかと思うと…ってほど危ない考えをしているわけではないけれど、どんどん遠くの存在になってしまいそうで不安にはなっていく。
今こうして仲良くできているのだから、本当はそんなに焦る必要はないはずなんだけど。
「サンキュ、じゃあお言葉に甘えてゆっくりしていこうかな」
「あ、でもさすがに閉店まで粘るとかしないでね？」
「しないよ、ったく…」
ただ、それは彼女が閉店までいるわけじゃないからってことも…なくはないかもしれない。やっぱり危ない考えしているかな…
「あはは、じゃ手が空いたらまた声かけるねー」
僕に対する周りの視線を痛いくらいに感じるが、彼女は何も臆することなく、というか気づいているかも定かではないが、フロアに戻っていった。
「はいはーい！あっ、今日もご注文は一緒？はい、すぐ持ってきますねー」
生き生きしている彼女を見ているのはうれしいような、つらいような。
なんだか、心境としては複雑もいいところだった。

うん、やっぱりこのままの関係でいるのは良くない。
時間が経つにつれ、僕の考えは少しずつまとまっていた。
今思うこの気持ちを、正直に伝えよう。ありきたりだけど、その結論に変わりはなかった。
ただ、いったいどうやって伝える？
彼女の入れてくれた、きれいに飲み干したブレンドのカップを吸い込まれそうになりながら見つめる。
…なんだか、彼女の顔がカップの底に映り込んでいるように見えた。
「なーに、やってんのー？」
「うおっ！」
我ながら自分でもあげたことのない声を出してしまった。
気のせいじゃなかった。カップの底に見えたのはまぎれもなく彼女の姿で、実際に覗き込まれていた。
不意な近づき方に僕は飛び跳ねて、足をテーブルにぶつけてしまった。
ブレンドのカップがその拍子に倒れた。
「ああっ！もう、何やってんのよー」
痛い、というよりはパニックになっていた僕は、倒れたカップを元に戻そうとしていた。
それよりも先に彼女が手を伸ばしていたのを見もせずに。
結果、僕は彼女の腕をつかんでいた。
「きゃあっ！」
カップは、また倒れている。
でも、今度は別のものも一緒に倒れこんでいた。
バランスを崩した、彼女が。
「もしかして、ご注文ですか？」
抱きつくような状況になっているにもかかわらず、彼女は冷静に…とは言えないか、突拍子もないことを言い出している。

ただ、少しだけ考えてその意味を理解した。
それは、僕の言いたかったこと。
「そう…だな。いつものとは違うものだけど」
「うん…」
何一つ、具体的なことは言っていない。すごく、急な展開だったかもしれない。
だけど今までの僕たちの関係が、そんな不自然なものも埋めてくれる。
何もためらうことなんてなかったんだな。彼女の目を見つめていると、そう思えた。
「あの…お時間かかりまして、あの、1時間ほどでお持ちいたしますっ！」
途切れ途切れにそうつぶやく彼女を、愛しく感じながら。
「わたしひとつ、お待たせいたしましたっ！もう少しで期間が終わっちゃうところだったんだからね」
それが、その1時間後のお話。

（後書き）

王道的展開を自分が書くとしたらどうなるのか？という感じ。

結論：やっぱりストレート

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1280h/

ご注文は？

2010年10月8日15時14分発行